觀 史 多 天 考

伴 戸 昇 空

觀史多天より此界に降誕されたという釈尊の誕生にまつわる伝説は、その入滅後相当早い時期に成立していたらしく、既に最古層の文献の一つである Suttanipāṭa 955 偈にも、それに闕説すると思われる記述が見出だせる。⁽¹⁾ しかし、この偈に対して Mahanidāsa (p. 447) は聊か不可解な釈を示し、そこに言う *tusita* とは、觀史多天界の事であるとも、或は阿羅漢達の事であるとも解し得ると記しているのである。⁽²⁾ 一体、*tusita* とは何を表わす語であったのか、又、何故に釈尊はそこから来られたと言われるに至ったのか。それが本稿のテーマである。

tusita (Pa. *tusita*) の語根は $\sqrt{tus}$ (Pa. $\sqrt{tus}$) であると言われている。この $\sqrt{tus}$ から派生した諸語は「満足・喜悅」の心的状態を表わすと解される事が多いが、それは $\sqrt{tus}$ に *to be satisfied, content, pleased* とした意味があるからである。⁽³⁾ 故に、*Tusita-deva* も「知足天・喜足天」等と訳される場合がある。「満足」とは、何らかの欲求が満たされた際

の、或は満たされている場合の心的状態を言うであらう。欲求の成就には大きな悦樂が伴う場合もある。従って、そこから「喜悅」という意味も出て来るであらう。

しかし、 $\sqrt{tus}$ は第一義的には *to become calm, to be silent* を意味するのであって、「満足」と言っても、それは本来歡喜踴躍するが如き状態を言うのではなく、欲求の鎮静した状態を意味すると見てよい。Vedic Sanskrit では、 $\sqrt{tus}$ は *to be satisfied, to satisfy, appease, bear hard on; to become quiet* を意味し、⁽⁴⁾ 明らかにそこには「鎮静」という趣きが強かったと言える。又、Indo-Germanic の語源にまで溯れば、 $\sqrt{tus}$ は *taus* であると考えられる。*taus* は *still, schweigend, zufrieden* の意味を持つ。⁽⁵⁾ 従って、 $\sqrt{tus}$ は、鎮静もしくは静穩な沈黙の状態をその基調として表わす語根なのである。Vedic には無かった *to be pleased, happy* という意味が $\sqrt{tus}$ に附加されるのは Classical Sanskrit になつてからである。

一方 Pali の $\sqrt{tus}$ に於ては、Vedic の $\sqrt{tus}$ に有った to become quiet 等の鎮静を表わす用法は消失し、代りに Classical Sanskrit の如く to be pleased, happy, joyful 等の意味が加わってくる。Pali の $\sqrt{tus}$ には、後に成る程「喜悅」の意味合いが強まって来る様である。しかし、Pali 聖典中の古い偈には、しばしば Brāhmana と Upaniṣad にも殆ど見られない Vedic の古い語形が見出だされているから、仏教の最初期に用いられていた言語や古い Pali は、Classical Sanskrit よりもむしろ Vedic Sanskrit に近いものであった様である。語形の類似と意味の類似とは必ずしも同列に置いて論ずる訳にはいかないが、教理と直接関わりの無い様な語の場合には、仏教の初期に於ては未だ Vedic 的意味を保存していたと考えてよいだろうと思う。故に、Pali 聖典の古い偈誦等に見られる *tusita* ($\sqrt{tus}$) も、Vedic の $\sqrt{tus}$ の意味に近く、「欲求の鎮静」を宗教的理想と見て、解脱者の心境を表わす語として用いられていたのではないであろうか。

Pali の *tusita* は *tuttha* と *tussati* ($\sqrt{tus}$) の過去受動分詞形 (pp.) であると考えられる。確かに、比較的古い文献の中には、天名としてではなく、形容詞的に用いられている *tusita* もしくは接頭辞 *sam-* を冠した *santusita* の例がいくつか見出される。Upālisutta の偈 (M, I, p. 386) 'Dhammapada 362 偈' Theragāthā 5, 6, 8, 981 偈' そと *Saṅgīti-*

suttanta (D, III, p. 218) に見られるそれである。Upālisutta の偈は Wālder の韻律からの研究により紀元前三百年以前の成立と考えられ、それは Suttanipāta の最古層に接続する時期である。残りの諸偈も、その内容の素朴さから見て、相当早い時期に成立したものと考えてよい。これら韻文中に見られる *tusita*, *santusita* は仏陀や阿羅漢達の心的状態を形容するに用いられており、それは明らかに解脱者の心境を表わしたものであると言える。又、漸遅れて Saṅgītsuttanta に見られる散文中のそれは、第三静慮と結び付けられるあたり、解脱より少しく外れた感があるが、それでも三昧より生ずる高度に非世俗的な、喜悅をも離れた満足感を表わしている点で韻文中の用法と通ずるものがあると言える。確かに、Pali 聖典の古層に見られる *tusita* は Vedic 的意味合いを保存していると言つてよいと思う。

ニカーヤの古層に於ては、*tusita* は迷いの世界から解脱した阿羅漢達——仏陀もその一人であった——の心境を表現する語であった。それが涅槃の同義語として登録されなかったのは、余程早い時期に天界の名として固有名詞化してしまつたからであろうか。 *tussati* の pp. として形容詞的に用いられていた *tusita* と天名の *Tusita* とは軌を一にして、全く同様に *tuttha* で換言解釈されるのが註釈時代の通例であったから、恐らく天名の *Tusita* はこの *tussati* の pp. からの転

用であったと考えてよいであらう。一方、Sanskritの *Tusita* も本来は *tusyati* (*tusj*) の pp. であっただろうと言われている。⁽²⁵⁾しかし実際にそれが Pali の *tusita* の如く形容詞的に用いられていることは——仏典梵文中に見出だせる僅かの例を除いては——全く無いと言つてよい。さすれば、*tusita* に形容詞的用法の無い Sanskrit 語世界にはなく、Pali 語世界即ち仏教内に觀史多天の起源を想定してよいであらうか。

Tusita という天名が現われるのは仏教文献だけでは無い。Jaina 教の諸聖典、*Yogabhasya* III-26、*Purāna* 類、*Mahābhārata*, *Harivamśa*, *Viṣṇu-smṛiti* 98-47 等にもそれは見出だせ⁽²⁶⁾。しかし、これらの外教の諸文献には *Suttanipāta* 955 偈より明らかに古いものは見出だせないと言つてよい。例えば、成立年代の確定し難い *Mahābhārata* の様な場合でも、*Tusita* という名が現われるのは最も成立の新しい第十二章・第十三章のみであるから、それは恐らく紀元後に属するであろう。他の諸文献に於ても、概ね成立の新しい部分にしか *Tusita* という名は出て来ない。もっとも、Jaina 教の *Anga* 聖典の資料には *Suttanipāta* と同じ位古くものも含まれてゐると言われているから、*Suttanipāta* の *Tusita* と Jaina 教の *Tusita* との前後関係には全く問題が無い訳ではない。しかし、Jaina 教を含めて外教では総じて *Tusita* に附随的な役割しか与えていないのに比して、仏教では開祖の誕生と結び付

けて扱われているのであるから、それは仏教内成立であると見てよいであらう。即ち、開祖がそこから降誕されたと言われる特別な意味深い天の名に、外教の天名を借用してそれに充てたとは如何にも考え難いことであるからである。觀史多天は、釈尊が人格化されて行く過程に、仏教内で成立した天であると言つてよいと思ふ。

本来は解脱者の心境を表わしていた *tusita* (pp. *ṅ tussati*, *tusj*) が、解脱者釈尊の人格化を通して天界に持ち上げられ、固有名詞としての用法が生ずるに到る。そして、その新しい用法が固定するに従つて、恐らくは混乱を避ける為に、*tusita* には形容詞的な用法が無くなつて行つたのではなからうか。或は又、*tusati* の pp. としては *tuttiha* より *tusita* の方が古形であつたのかも知れない。それが Sanskrit の *tusita* (pp. *ṅ tusyati*, *tusj*) の影響を受けて、*tuttiha* の方が多用される様になり、Vedic 的な意味を保存していた *tusita* は姿を消して行き、固有名詞化していたものだけが残つたのかも知れない。何れにしても、*tusita* は *tuttiha* で換言解釈されているに對し、その逆、即ち *tuttiha* を *tusita* で説明する例は見出だせない点が暗示的である。

では次に、釈尊は何故に *Tusita* より来られたと言われる様になつたのであろうか。釈尊の出家の動機も——後の仏伝が説く如く衆生の救済にあつたのではなく——自己自身の解

脱にあったと考えてよい。釈尊は解脱を求めて辛苦の後、終にその究極の境地に至られた。それは換言すれば、自己の解脱を求めて精進し、行き着いた所が *tusita* (解脱者の境地) であったと言えよう。即ち、*tusita* は「自己の解脱に満足する」という心境であったと考えられる。しかしながら、釈尊はこの自己の解脱の満足にとどまり、沈黙し、寂滅してしまわれた訳ではなかった。暫しの躊躇いの後、猛然と法輪を転じ始められたのである。思うにこの積極的なエネルギーは解脱者一般に所有されるものではない。辟支仏の如く寂靜なる満足にとどまる解脱者も居たからである。寂靜な満足 (*virāga*) にとどまる限り、それは衆生に益する所無く、個人的な解脱の域を出ない。ところが、釈尊はそこから衆生の教化へと歩み出されたのである。その意味で、釈尊は、*tusita*——自己の解脱を以て満足とする境地——より踏み出された方だと言えよう。それは、衆生の側から見れば、まさに「釈尊は *tusita* より来られた方である」とは言えないであらうか。

般涅槃されて程無く、徐々に釈尊の神格化が始まった。その様子は諸經典より窺い知られる。最も素朴な仏伝資料では、未だ、釈尊が天界から降誕されたという記述は見られない。それが、釈尊の如き偉大な人格が一般人と同じ様な出生を受けられたはずはないと考えられる様になり、終には、天界から生まれられたに違いないとされるに至ったであろう。

觀史多天考(伴 戸)

天界から生まれられたのであるとすれば、次にはその天の位置を定める必要が生じたであろう。仏教の初期には、独自の世界形態論を立てていたとは思われないから、それは当時の常識的世界形態觀の枠組みの中で考えられたに違いない。仏陀当時は、*Rg-veda* の主要なる神格 *Indra* は、未だ神々の *W devatāḥ · devānam indra* という呼称は維持していたものの、既に往時の勢力は無く須弥山上に住まう地居天となり、世界の最上位は梵天 *Brahma* によって占められていたと考えられる。即ち、当時の學術的常識に従えば、天界は梵天を究まりとし、須弥山より下は帝釈の支配下にあったと言つてよからう。故に *Tusita* 天を一世界内に配しようとするれば、それは、帝釈の支配を避ける意味で須弥山より上方であることが相応しく、且つ、世界の上限である梵天界よりは下方でなければならなかったであろう。觀史多天が天界に組み込まれた時期は、明らかに梵天界より上の色界・無色界諸天が成立する以前のことであると見なければならぬ。この点に關しては、釈尊と觀史多天との本来的關係に明確な解釈を与え得なかった婆沙論等の諸論師も気付いていた様である。

(註省略)

〔昭和56年度文部省科学研究費一般研究Bによる研究成果の一部〕

(大谷大学特別研究員)